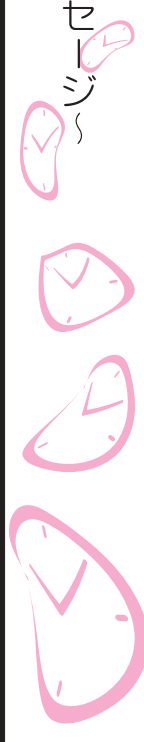


# ときの手箱

博物館からのメッセージ



第95回

## 幕末維新の彦根の偉才

## 漢詩人・岡本黄石と書家・日下部鳴鶴との交流

岡本黄石（1811～98）は、幕

末・維新期の彦根藩の家老として、藩主井伊直弼が暗殺された桜田事変後の藩の混乱をとりまとめた人物としてつとに有名です。しかし一方で、彼が優れた漢詩人であったことは、今日ほとんど知られていません。明治元年（1868）、彼は、藩主直憲より新政府の代議員として推挙されますがこれを固辞、家督を息子に譲って隠居し、詩を詠むことを専らと

する身となりました。ときに58歳のことで

黄石は、詩壇の中心的な存在であった梁川星巖（1789～1858）に若くしてその才を認められていました。これは、星巖門人の漢詩集の発刊にあたって、黄石の詩が巻頭を飾ったことから明らかです。

維新後しばらくは彦根の芹川近くに隠棲しましたが、明治4年（1871）



岡本黄石80歳を祝う詩 日下部鳴鶴 筆

には京都に居を移し、京都と東京を拠点にして全国各地を遊歴。同15年には東京の麹町平河町に移りました。当時平河町には、やはり彦根藩出身の日下部鳴鶴（1838～1922）が居を構えていました。

このとき黄石72歳、鳴鶴45歳、実に27歳の年齢差がありますが、郷里を同じくする者として2人が既に知己の間柄であったことは、黄石が自らの家を得る前に、鳴鶴の邸に一時身を寄せていたことからも分かります。顔を会わせる機会が多くなったことで、その親密度は増したことでしよう。鳴鶴は書家として出発して間もない時期で、日本近代を代表する大書家と認識されるのはもう少し後になってからのことです。

同16年（1883）、黄石は、73歳にして居宅に漢詩の結社・麹坊吟社を開き、そこに鳴鶴は多くの門人の一人として参加します。門人はほかに、巖谷一六、谷鉄臣、金井金洞、田中光顕、杉聴雨など、それぞれたる顔ぶれでした。吟社では、杜甫や蘇軾など、おもに中国の唐宋時代の詩を選び、評註を加えるなどの方法で勉強がおこなわれました。鳴鶴の作品のほとんどは漢詩の書であるため、

ここでの学習が自らの詩作に少なからぬ影響を与えたことでしょう。

そして明治25年（1892）5月11日、東京の八百松楼において、黄石の80歳の長寿を祝う宴が盛大に開かれました。写真は、鳴鶴がその祝いのために揮毫した作品です。ここで鳴鶴は、黄石は胸中に一点の塵もなく、町中に居ながらにして優れた隠者であることを褒めたたえています。

当時の文化人は、現代よりも遥かに人との交流を重視します。交流の場が作品発表の場となり、交流することによってお互い触発されるわけで、実力・評判を兼ね備えた人は、人とのつき合いの才能も持ち合わせていたともいえるのです。

黄石と鳴鶴も、お互い新春に詠んだ漢詩文の遣り取りをおこなったり、共同で一つの作品を作り上げたりと、交流による多くの作品を遺しています。

（彦根城博物館学芸員 高木文恵）

写真の作品は、彦根城博物館「一マ展」書家・日下部鳴鶴と鳴鶴をめぐる人々」で7月23日（金）から8月17日（火）まで展示をします。